走り読み文学探訪リバイバル(その４)

「流れる星は生きている」　著者　藤原てい

中公文庫(1976.2.10発行)621円(322p)［初版:1949.5 日比谷出版社］

紹介者：榎本博康

［紹介］

これは藤原ていと３人の子供の，１年以上にわたる旧満州からの脱出行の記録である。

昭和20年(1945年)8月9日，ソ連軍参戦の夜，満州新京の観象台（気象庁の地方局）の各家庭に非常召集がかかった。彼女の夫，後の作家，新田次郎は公務のために別行動し，ていは５歳(男)，３歳(男)，１歳(女)の３人の幼い子供を連れて気象台の家族達と逃れることとなった。集団ではあるが，皆自分のことだけで精一杯だ。

新京から南下し，鴨緑江を渡って北朝鮮の宣川にしばらく滞在して厳冬を過ごす。翌年８月に再出発して，新幕から徒歩で山越えし，38度線を越えて南の開城に着き，釜山から船で博多に着いたのは9月21日であった。

さらに列車を乗り継いで故郷の諏訪に帰り着き，駆けつけた両親に迎えられる。ついに彼女はひとりの子供も失わなかった。

［感想］

一見ランニングとは無関係の話だが，私の心のなかでは密接だ。まずクライマックスである，38度線越えを見てみたい。

それまでの移動は列車(貨車)を利用したが，ここは徒歩より他にない。激しい雨が降る。体温を失いかけた子供を救うために，付近の民家に飛び込み，必死に頼んで納屋と湯を借りて一晩，何とか事なきを得る。次に共同で牛車をやとうが，金が足りないていは，子供だけ乗せて歩く。また激しい夕立が降る。途中に何本もの川がある。その度にていは一人づつ子供を抱えて３回渡る。時々子供を川に沈めて軽くする。渡り終えた頃に，休憩を終えた人達は出発する。割れた足の裏に小石が食い込む。そして眠らぬ日々が続く。泥水の上澄みを手ですくうと，１歳の子供がおいしそうに飲む。

そうして一週間,38度線が近い。人々はリュックや傘などをかなぐり捨てて急ぐ。ソ連兵が無言で遮断機を開ける。それから夜にかけて最後の山越えをする。体力の限界を超えて，死んでなるものかという，怒りのような感情で進む。山を下って倒れ，米軍に収容される。

以前に私がつくづくこのような体力と気力の必要性を感じたのは，会社に勤めて２年目であった。１年目から設計に携わった大型プラントの試運転の場である。準備の末，午前10時に点火したが，安定には時間がかかった。若かった私はプラント内を駆け廻っていたが，翌午前2時頃に地上30mのギャラリーの上で疲れ果てて動けなくなった。やがて仮眠から覚めると，先輩達は黙々と作業を続けており，プラン

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

トは正常に稼働していた。くやしかった。

私がウルトラマラソンを愛好するようになったのは，このような背景もあったからだろうか。今年(1997年)５月の萩往還250㌔は初日の夜中から翌日の夕方近くまで，重い雨が降り続いた。また10月の奥多摩24時間山岳マラソンは，昨年(1995)，一昨年(1996)と一晩中激しい雨であった。私はこれらの荒天を心から楽しんだ。

誰もていの経験を繰り返したくはない。しかし，天災や戦災などの時に家族を生き延びさせるためには，誰でも一度は自力で長距離，長時間を旅する経験が必要ではないだろうか。ウルトラマラソンは絶好の機会と思う。

強引にランニングの話に持ってきてしまったために，この本の本質からそれてしまった。短いながら補足する。

ここに一人の民間人が体験させられた，この戦争の本質がある。それ故に，ていの生き抜くという強烈な思いに，子供を絶対に生きて連れ帰るという意志に，私は深く勇気づけられる。

極限状態での人間性が赤裸々に語られる本書は，人々の心の傷が癒える間もない，戦後すぐに発行された。私はその早さが不可解だった。しかし後書きを見ると，帰着後に健康を失ったていは，子供達への遺書のつもりで，祈るように書いたとある。

(1997.6.15)

［リバイバル感想］

この本を今買うと、中公文庫（改版）2002発売686円＋税、または偕成社文庫（新版）2015年発売800円＋税である。脈々と読まれているのだろう。

これを書いた時には想像もしなかったことに、2011年3月11日に東日本大震災を経験した。私は出張中で東京の神田付近の路上におり、激しい揺れを体験した。九段会館前では血を流した卒業式姿の女性たちが座りこんでいた。千代田区役所からは職員らが路上に出てきた。電車が全て止まり、徒歩で帰宅することとした。道路は同じような人々が車道にも溢れた。14時間かかった。その時の感想は、これって100キロマラソンの制限時間と同じだ、という呑気なものだったが。

3.11のあまり生々しくない写真

当時は未だ携帯電話の時代であり、情報をどうやって仕入れようかと考えたが、かばんの底のボイスレコーダーにFMラジオ機能があることを思い出した。昔、新潟地震の時に経験した揺れ方から震源地は300km越えと判断し、東海地震だろうと想像したが、ラジオで東北と知って驚いた。大規模な津波があって、海岸に多くのご遺体が確認されていた。原発がどうなったかは、その時の放送では分からなかった。昨日と今日とで、全く違ってしまったことを悟った。ラジオを聴きながら歩いている自分に、現実感が希薄だった。

この本からは戦争の本質について考察すべきであろうが、本連載の主旨からは家族と自らを救うために、持つべき覚悟と、備えるべきことがあると知ることができるだろう。そして、ていのような覚悟があれば、完遂できる確率は高まる。

(2020.6.01)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.